# ブルクハルトの名誉観

中　谷　博　幸

## Ⅰ

「私たちの出発点は、唯一永続的で、私たちにとって可能な中心である、耐え忍び、努力し、行動する人間である[1)]。」これはよく知られたブルクハルトの言葉である。いったい、何を「耐え忍」ぶのであろうか。この言葉は、『世界史的考察』の中に出てくるが、同じ書物のなかに、「権力はそれ自体悪である[2)]」という同じく有名な言葉がある。この二つを安易に結びつけると、権力に耐え、抗する人間という見方が生じる。しかし、これはブルクハルトの見解とは異なる。彼は一人一人の人間を突き動かす衝動に歴史の根源を見ていた。その点でマックス・ウェーバーに近いところがあるが[3)]、ウェーバーよりも衝動の暗黒面を凝視していた。彼は、人間の暗部を最も深く見つめた歴史家のひとりである。たとえば、あの『イタリア・ルネサンスの文化』の最初の章をひもといてみよう。そこでは、14世紀以降のイタリアの専制君主たちの悪行が延々と述べられていて、一般的なルネサンス観との違いに戸惑ってしまう。

ブルクハルトは、人間一人一人の悪を深く見つめつつ、それに抗するものに目をとめようとした歴史家であった。そのとき、彼が注目したのが、「悪にたいしてきわめて強力に抵抗する倫理的な力」としての名誉心Ehrgefühlである。『イタリア･ルネサンスの文化』では、名誉心は今日の人間の「決定的行動原理」であり、近代の人間がキリスト教倫理の中心である信仰、希望、愛を失ったあとも、自らのうちになお残しているものである。それは「良心と利己心Selbstsuchtの不可思議な混合物」である。そのため現実には様々な形態をとって現れる。一方で、「非常な利己主義Egoismusや大きな悪徳と手をたずさえ、途方もない欺瞞もやりかねない」が、他方で「およそ一つの人格のうちに残っていた一切の高貴なものも、これと結びついて、この源泉から新たな力を汲み出しうる。」名誉心は良心と利己心を核として様々な姿をとりうる。たとえばブルクハルトは、名誉心Ehrgefühlと名声欲Ruhmbegierの区別は現実には難しいが、本質は異なるものだとしている[4)]。ブルクハルトは、『イタリア・ルネサンスの文化』（1860年出版）以外にも、『ギリシア文化史』（1872-86年にかけて講義）や『世界史的考察』（1868/69, 70/71, 72/73年講義）でこの名誉心を扱っているが、Ehrgeiz、Ehrliebe、Ruhmsinnなどの言葉を、その時々の文脈で使っている。本稿では、それぞれの言葉の意味と訳語を厳密に区別することなく、一括して名誉心として扱うこととする。良心と利己心よりなる名誉心の広がりがどのようなものであるかを明らかにすることを目的としているからである。

## Ⅱ

すでに述べたように、ブルクハルトによれば名誉心は近代になって重要になった行動原理である。それは、近代になって個人のあり方が変わったことと関連がある。中世的人間は、「自己を、種族、民族、党派、団体、家族として、あるいはそのほかなにかある普遍的なものとして認識していたにすぎない[5)]。」それが、まずイタリアにおいて、なんらかの身分や団体に属していることによって評価されるのではなく、彼自身がもつ才能や個性によって評価されるようになり、「自己を個人として認識」するようになる。このような個人としての意識は、ルネサンスのイタリアが最初ではなく、すでに古代ギリシアのポリスに

おいて強烈に現れていた。名誉心も、それと関連しており、古代ギリシアにすでに存在する。

「ギリシア人において人間行動の有力な動機が数え上げられるたびごとに、名誉心（ティメ）Ehrliebeというものが現れないことはない[6)]。」たとえば、トゥキュディデスは第一に名誉心、次いで恐怖と利益をあげ、イソクラテスは享楽と実利に次いで名誉心を挙げた。ブルクハルトによれば、古代ギリシアで名誉心に触れた最も有名な重要な記述は、プラトン『饗宴』にある。ソクラテスはマンティネイアの婦人ディオティマから聞いたという形式を借りて、次のように名誉について語っている。「人間は、有名になり、不滅の名声を永遠に打ち立てるために、異常なほどの力を使うものです。誰でもそのために、わが子のためにするよりも、なお一段と覚悟を固めてどんな危険をも冒し、金銭を費やし、いかなる労苦も厭わず、さらにはそのために命を捨てることもあるのです。・・・自分たちの卓越性が不滅であり、自分たちの名誉が栄光に満ちたものであるためには、人々は何でもやるものなのです。またその人たちが卓越していればいるほど、いっそうそうなのです。」ギリシアにおけるこの名誉への渇望、「行為によってその生涯に光彩を添えようとする努力」は、「後世の人々の間での名誉Ruhm bei der Nachwelt」を核にもっていたことが、大きな特徴である[7)]。

このような名誉心は、ギリシア人が「他の民族よりも早い時期に個人としての人間になっていた」ことと関係している。彼らはポリスの公的な活動において、互いを知り合う機会と閑暇をえた。また、「協議における公の出場から、あらゆる種類の実行や力の行使に至るまで何もかもが競争的、競技的に推し進められることで、人々から社会的物怖じsoziale Scheu」が取り去られ、率直に自己を際立たせた[8)]。

ホメロスの英雄たちにおいて、すでに名誉心は見られる。ブルクハルトによれば、英雄の性格には、この時すでに、「つねに先頭に立ち、他に抜きんでるようにせよ」というモットー（名誉心Ehrgeiz）とともに、「人間本性のまったく挫けることのない、素朴な利己心Selbstsucht」が見られた。「およそ改悛の情などはこれっぱかりも持つことはなく、しかも偉大であり、かつ厚情的態度を有している。」これに情熱が加わり、彼らの理想は、限界まで追求される[9)]。彼らは後の世の名声をすでに目標にしていた[10)]。ここにおける利己心はおおらかであり、功利的な傾向はなかった。

紀元前５世紀になると、競技的なものが生活全体に拡大し、個人はいっそう利己心を率直に表現するようになる。哲学者、ソフィスト、詩人、画家、技術者やあらゆる一般の練達の士たちは、「遠慮なく自己を顕示する術と意志を持っており、世論もこれを彼から求めた。」古代ギリシアは、善と美の兼備を現すカロカガティアという積極的な徳と、慎み、正気、思慮、節度、中庸などを現すソプロシュネという消極的な徳を、二つの重要な徳として追い求めたが、利己心の抑制と関わるソプロシュネは、芸術においてもっとも高貴な力として発揮されたものの、ポリスの実生活においては、「実際上の思い上がり（ヒュプリス）を抑制することにのみ関わる」とされた。それ故、自分の価値を覆い隠す必要はなく、「またそこらの下らない奴らの陰で小さくなっている必要もなかった」のである[11)]。

ブルクハルトはこの時期の著名な三名の人物を、名誉心との関わりで考察している。紀元前480年のペルシア戦争でアテナイの海軍を率いて勝利に貢献したテミストクレス（BC528頃―462頃）は、「個人的な能力と敢為の気性に満ち、どこにあっても人の眼につくことをやってやろうというあの衝動に突き動かされていた・・・彼は、民主制の中で勢力をなし、人々を眩惑するために、莫大な資金を必要としたのであって、この点彼は経済上の良心を一片だに持っていなかった[12)]。」一般にアテナイ民主政の黄金期を現出したとされるペリクレス（BC490頃―429）は、「アテナイ的性質の代表者として、自己を抑制し、この都市に余すところなく献身し、この都市の偉大さを自己の偉大さと同一視した」が、「完全な市民と巨大な人間との対立を自己のうちで調和的に一致させようとした。だが、それは彼にもかならずしも完全には成

功していない[13]。」ソクラテスの弟子で、ペロポネソス戦争期のアテナイの政治家・将軍であったアルキビアデス（BC450頃―BC404）は、政治的軍事的な才能に富み、アテナイ民衆の圧倒的な支持を得た時期もあった。しかし彼は、無節操で、亡命を繰り返し、最後はフリュギアに亡命してそこで暗殺された人物である。「彼は、彼固有のあの途方もない名誉心Ehrgeiz―ピロニコン（競争心）とピロプロトン（第一人者たろうとする欲求）―をアテナイ人たちに感染させ、彼らの空想力を自分の支配下に置こうという意志を示した。」紀元前417年に彼が提唱したシチリア遠征は、「向こう見ずの利己主義Egoismusがあえてなしえた最大のものであった[14]。」

紀元前４世紀になると、ポリスはもはや人々を満足させることはなかった。ブルクハルトは名誉を求める三つのタイプを描く。一つは、ポリスを超えた汎ギリシア的な理想主義者である。このタイプで最も優れているのは、エパメイノンダスである。そこには「欠乏に耐えるあらゆる種類の能力と、おのが恣意を排してより善きものに就く態度」が見られるが、それは、ギリシア人の本領ではなかったので、このタイプはごく少数しか現れなかった[15]。同時に、犯罪にまで手を染めて非常に利己主義的な形で名誉を求める人々が登場する。アレクサンドロスの父「ピリッポス二世の殺害者パウサニアスは、この犯行に及ぶ前にソフィストのヘルモクラテスに、どうしたらいちばん有名になれるだろうかと訊ねたところ、最も偉大な事業を成し遂げた人を殺すことだ、という返事を得たのであった。」[16] 最後に、「偉大な現実的政治家」であるマケドニアのピリッポス二世が現れる。彼は「自分にそれが利益になるとなれば破壊的行動をするが、通常は、既存の諸力を恐れず、むしろこれを自分のために使う能力をもっていた。」彼の周りには、専制君主的なものに共感する教養あるギリシア人たちが姿を現してきた[17]。こうして紀元前４世紀にはギリシア人の名誉心は分裂していった。そして、紀元前３世紀になると、なお名誉を求める人々は存在したものの、真の名誉心は凋落していくのである。かわって、キリスト教の禁欲・謙遜が登場してくる。

## Ⅲ

名誉心は、キリスト教の普及によって表面から隠れるが、ルネサンス期のイタリアにおいて、再び姿を現す。しかしまずは解き放たれた利己心が荒れ狂う。ブルクハルトによれば、イタリア・ルネサンスは、個人の解放をもたらした。何らかの身分や団体に属していることによって評価されるのではなく、彼自身がもつ才能・個性によって評価される人物が登場する。しかし、このような個性ある個人は、14世紀において、まず専制君主として現れる。これら専制君主や諸都市において、「束縛のない利己心Selbstsuchtのもっとも恐ろしい様相」が姿を現す[18]。絶えざる外からの脅威とそれと呼応する国内の擾乱は、支配者の心情に恐ろしく有害な作用を及ぼした。「一方では見せかけだけの絶大な権力、享楽やあらゆる種類の利己心Selbstsuchtへの挑発が、また他方では敵対者や謀反人が、このような支配者を悪い意味での専制君主に仕立て上げてしまったが、これはほとんど避けがたいことであった[19]。」肉親をも巻き込んだ裏切りや殺戮は日常茶飯事であった。これら専制君主たちの最後も悲惨な例が多い。1405年にパドヴァがヴェネツィア軍に包囲された時、市内はペストに荒らされ、もはや防衛する兵力もなかった。この時、カッラーラ家の最後の君主が悪魔に向かって「殺してくれ」と叫んでいるのを、衛兵が聞いたという[20]。

14世紀のイタリアは、古代のギリシアと似て、「およそ心にもない謙遜とか、また偽善というものをほとんど知らない。人目を惹くこと、他人と違っていること、また違って見えることを物怖じするような人間は一人もいない[21]」。解き放たれた利己心は、すでに述べたように専制主義者たちを生み出した。同時に、ダンテや人文主義者たちによって、近代的名声への欲求が形成されていく。核となるのは、名声とは「その人自身の力で獲得した声価Notorietät」[22] であるという考えである。そのような声価を求める動き

が様々現れる。都市の地誌には、「優れた精神と高貴なる才能（virtus）によって、聖者の列に加えられる（adnecti）に値する高名な男たち」[23]のことが記される。諸都市は、声価を得た著名人たちの遺骨を追い求めた。人文主義者たちによって古代の教養が名声と結びつけられる。15世紀になると専制君主や傭兵隊長たちの間にも、人格が優れ人文主義的教養を備えた人物たちが現れる。フランチェスコ・スフォルツァ（1401-66）や、ウルビーノの大フェデリーゴ（1422-82）、「教養なき王は冠をいただいたロバにすぎない」[24]と言ったアラゴン家のアルフォンソ一世等である。ウルビーノのフェデリーゴの宮廷は有名な蔵書を誇った。宮廷では500人の廷臣を養い、厳正に管理されていた。「ふざけたり、中傷したり、ほらを吹く者はいなかった。宮廷は同時に他の有力な殿方たちの師弟のための軍事教育施設でもなければならず、師弟に教養を修めさせることはフェデリーゴ公の名誉に関わる事柄Ehrensacheであった[25]。」そして、あの「普遍的万能人l'uomo universale」、「あらゆる分野において斬新なもののみを創造すると同時に、その種類のものとして完成されたもののみを創造し、しかもなお人間としてもこのうえなく偉大な印象を与える幾人かの芸術家」[26]が現れる。

しかしイタリアのルネサンスにおいても、名誉心が利己心を制御することはきわめて難しい事柄でであった。フランチェスコ・スフォルツァは、ブルクハルトによって「天才と個性的な力の勝利が、この男におけるより輝かしく現れたことはない」と形容された人物であり、ミラノは彼を支配者にもつことを「名誉」と感じていた。しかし、「入念な広い教養を身につけた子供たちは、おとなになった時には、限りない利己主義Egoismusに身をゆだねてしまった[27]。」16世紀になると、人文主義者たちは自分たちの利己心を制御することはできなかった。「たがいに相手に抜きんでようとし始めると、もう手段を選ばなかった。あっというまに彼らは、学問上の根拠を武器として使うかわりに、誹謗やこれ以上なくひどい中傷をもってする攻撃に転ずるのである[28]。」こうして彼らは外的要因とともに自ら没落していく。

## Ⅳ

名誉心はブルクハルトによって、利己心と良心の混合と理解された。しかし、実際に古代ギリシアとイタリアのルネサンスの現実の描写を見ると、利己心の働きにほとんどが費やされ、良心の働きを十分に描くに至っていない。この利己心は、その後近代社会においてはどのような姿をとるのであろうか。

要点を述べると、利己心は営利欲となってさらに解き放たれ、功利主義的傾向を帯びる。産業革命は営利欲の肥大化をもたらし、すべては実利に還元されていく。この営利欲の担い手が革命によって国家の中心に登場する。彼らの営利欲は、量的なものであり、限りなく拡大されていく。この要求は、国家へ向けられ、権力の肥大化が帰結する。そして教養もそれに巻き込まれ、芸術は荒廃していく[29]。

『イタリア・ルネサンスの文化』で、ブルクハルトはそのような傾向の芽をラブレーの次の言葉に見出していた。「彼らの規則には次の指示しか含まれていない。汝の好むことをなせ。それというのも、生まれがよく、立派な教育を受け、上品な仲間と交わっている自由な人たちは生まれながらにして、つねに彼らを役に立つ行為へと駆りたて、悪徳へ向かうのを制止するような性向と刺激を持っているからである。それを彼らは名誉心honneurと呼んでいる[30]。」この名誉観では、利己心は良心に吸収されて、独自の存在として認められていない。ここにブルクハルトは、フランス革命につながる「人間本性の善にたいする信頼」を見ていた。このような一種の性善説の傾向がはっきりと姿を現すのが、ルソーの自然観と社会契約説であるとブルクハルトは考えていた。これは一見理想主義的に見えるが、人間の衝動を善ととらえることにより、存在する悪は、人間に起因するのではなく、制度にあるとされる。そして、産業革命後の営利欲は、利己心の近代の現れであるにも関わらず、肯定されていく。この点に、ブルクハルトは近代文化の

根本的な問題を見ていた。

## V

今まで確認してきたところでは、ブルクハルトは名誉心を良心と利己心の混合と捉えつつも、その良心がいかに機能して利己心の働きを抑えるかについては、古代ギリシア文化やイタリアのルネサンス文化において、具体的に述べるには至っていない。むしろ、『イタリア・ルネサンスの文化』では、「この名誉心という力がどんなにかしばしば利己心の猛烈をきわめた攻撃に勝利を収めたか、また、どのようにしてこの攻撃をしのいだかは、かならずしもわれわれの知るところではない[31]。」とさえ述べている。『世界史的考察』の「個人と普遍（歴史における偉大さ）」では、「偉大な個人を内面的に駆り立てているものについて述べれば、まず第一に挙げられるのが大ていの場合、・・・名誉心Ehrgeiz、すなわち同時代人たちのあいだで名声を得たいという強い気持ちである」[32] という一般的な見方を取り上げている。しかし、ブルクハルトはこの名誉心は実は二次的にすぎないと語る。まして、古代ギリシアに見られたような後世の名声への思いは三次的な効果をもつだけである、と考える。では、本当に第一に挙げられるのは何なのか。「決定的なもの、人を成熟させ、あらゆる面にわたって人を育てるものは、こうしたものよりもむしろずっと権力志向Machtsinnの方にある。この権力志向は、抗し難い衝動として偉大な個人を万人の眼に見えるところへと駆り立てるが、これはまたおそらくは通常つぎのような人間についての判断と結びついてもいる。すなわち、そもそも人間は、もはや名声といったものに総括される世人の意見を重視せず、むしろ人々を服従させ、自分の役に立たせる力を持っているかどうかということに関心を持つものだ、という判断である[33]。」この発言においては、ブルクハルトは、もはや名誉心の倫理的力を信じていないようである。その理由を、「この名声は実のところ理想的・絶対的賞讃を表している、というよりは、むしろ他者の意向に依存している感情なのである」[34] という点においている。結局のところ、名誉心は、他者に依存するものであり、それ故に、個人が置かれている社会のあり方に影響されざるをえない。古代ギリシアの英雄時代においては、名誉心が溌剌としたものであったのが、近代以降、利己心が営利欲として解き放たれるや、名誉心は死に絶えたと判断したのではないだろうか。

では、人間の利己心、利己主義を押さえることはできるのか。最後にもう一度、『世界史的考察』の「個人と普遍（歴史における偉大さ）」に注目したい。ここでブルクハルトは、偉大さを二つに分けている、魂の偉大さSeelengrößeと政治的偉大さpolitische Größeである。「魂の偉大さは、倫理的なもののために利得を断念することができるという点にあり、また、ただたんに抜け目なさからではなく、内面の善良さから自発的に自己を抑制する点にある。」これはきわめて希である。他方、「政治的偉大さはエゴイスティックでなければならず、あらゆる利得を収奪しようとする[35]。」この魂の偉大さにおける自己抑制は、「他者の意向に依存する」のではなく、自らの自発性に基づく。

以上から次のように推測できるであろう。ブルクハルトは、『イタリア・ルネサンスの文化』を書いた頃は、名誉心の「悪にたいしてきわめて強力に抵抗する倫理的な力」に期待するところがあったのであろう。しかし、古代ギリシア文化を射程に入れて、近代文化の行き着くところを考察するなかで、名誉心の倫理性について疑問をもつようになった。代わって重要となってくるのは、魂の偉大さにおける禁欲や自己抑制である。このタイプに属するものとして、すでに『コンスタンティヌス大帝時代』（1853年出版）では、初期キリスト教の隠修士等について書いていた。『ギリシア文化史』では、ディオゲネス等を描くことになる。『イタリア・ルネサンスの文化』でもっとも印象に残るのが、ダンテの名声でもなく、レオン・バッティスタ・アルベルティの万能ぶりでもなく、ガスパロ・コンタリーニや、ポンポニウス・ラエ

トス、等であるのは、それと無関係ではないであろう[36)]。この問題は、ブルクハルトにおける宗教観、文化と宗教との関わりを問うことになるが、別稿の課題としたい。

## 注

1) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke,* Basel/Stuttgart 1978, Bd. IV, S.5.ヤーコプ・ブルクハルト著、新井靖一訳『世界史的考察』（筑摩書房　2009年）、16頁。以下、訳文は邦訳を使用したが、一部変更したところがある。

2) *Ibid.*, S.25.『世界史的考察』65頁。

3) たとえば、Wolfgang Hartwig, Jacob Burckhardt und Max Webr. Zur Genese und Patologie der modernen Welt, in: ders., *Geschichtskultur und Wissenschaft,* München 1990, S.189-223.

4) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke,* Bd. III, S.293. ヤーコプ・ブルクハルト著、新井靖一訳『イタリア・ルネサンスの文化』（筑摩書房　2007年）、510-511頁。

5) *Ibid.,* S.89.『イタリア・ルネサンスの文化』、163頁。

6) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke,* Bd. VI, S.330. ヤーコプ・ブルクハルト著、新井靖一訳『ギリシア文化史』第２巻（筑摩書房　1994年）、475頁。

7) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke,* Bd. VIII, S.220. ヤーコプ・ブルクハルト著、新井靖一訳『ギリシア文化史』第４巻（筑摩書房　1993年）、324頁。

8) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke,* Bd. VI, S.330,360.『ギリシア文化史』第２巻、475頁、519頁。

9) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke,* Bd. VIII, S.31.『ギリシア文化史』第４巻、45頁。

10) *Ibid.,* S.36.『ギリシア文化史』第４巻、53頁。

11) *Ibid.,* S.208f.『ギリシア文化史』第４巻、305頁。

12) *Ibid.*, S.214.『ギリシア文化史』第４巻、314頁。

13) *Ibid.*, S.215.『ギリシア文化史』第４巻、315頁。

14) *Ibid.*, S.217f.『ギリシア文化史』第４巻、317-319頁。

15) *Ibid.*, S.343-348. ヤーコプ・ブルクハルト著、新井靖一訳『ギリシア文化史』第５巻（筑摩書房　1995年）、52-57頁。

16) *Ibid.*, S.350.『ギリシア文化史』第５巻、61頁。

17) *Ibid.*, S.363.『ギリシア文化史』第５巻、80頁。

18) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke,* Bd. III, S.2.『イタリア・ルネサンスの文化』、15頁。

19) *Ibid.*, S.6.『イタリア・ルネサンスの文化』、21頁。

20) *Ibid.*, S.7.『イタリア・ルネサンスの文化』、23頁。

21) *Ibid.*, S.90.『イタリア・ルネサンスの文化』、164頁。

22) *Ibid.*, S.102.『イタリア・ルネサンスの文化』、183頁。

23) *Ibid.*, S.101.『イタリア・ルネサンスの文化』、181頁。

24) *Ibid.*, S.102.『イタリア・ルネサンスの文化』、183頁。

25) *Ibid.*, S.30.『イタリア・ルネサンスの文化』、64頁。

26) *Ibid.*, S.93.『イタリア・ルネサンスの文化』、170頁。

27) *Ibid.*, S.27.『イタリア・ルネサンスの文化』、56頁。

28) *Ibid.*, S.182.『イタリア・ルネサンスの文化』、325頁。

29) 仲手川良雄『ブルクハルト史学と現代』（創文社、昭和52年）13-71頁。

30) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke*, Bd. III, S.294.『イタリア・ルネサンスの文化』、512頁。

31）*Ibid.*, S.294.『イタリア・ルネサンスの文化』、512頁。

32）Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke,* Bd. IV, S.176.『世界史的考察』419頁。

33）*Ibid.*, S.177.『世界史的考察』420頁。

34）*Ibid.*, S.177.『世界史的考察』420頁。

35）*Ibid.*, S.170.『世界史的考察』402頁。

36）たとえば、ガスパロ・コンタリーニについて、次のように書いている。「窮乏と労苦のさ中にあってさえ、彼は幸福であった。それは、彼がむしろそういう労苦や窮乏した状態を望んでいたからであり、彼は贅沢に慣れず、空想に身を委ねず、気まぐれな所もなく、むしろつねにほんの僅かなもので、あるいは何もなくても満足していたからであった。」Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke*, Bd. III, S.186.『イタリア・ルネサンスの文化』、332頁。